

奈文研は昼夜のサッカーが盛んで、入所すると、何よりもまず足の大きさを聞かれる、というまことしやかな噂を耳にしていたが、私の場合は、なんのまえふりもなく突然、「お前は青だな」であった。これは予想外のことであって、サッカーのチーム分けで青チーム、ということを理解するまでにいささかの時間を要したことは言うまでもない。また、3ヶ月にも及ぶ発掘現場を乗りきる体力を養うためにも、昼夜のサッカーはもってこいであるとも言われた。入所2年目から3年目にかけて、平城で1～3月、現場班の編成替えで引き続いて4～7月、さらに、飛鳥藤原へ異動して12～3月と、数多くの発掘現場を経験することができたのも、きっとサッカーをしていたおかげであろう。もっとも、サッカーでは、おでこを切ったり、頭を縫ったり、いろいろとお騒がせしたのであるが…。思えば、それぞれ前厄、本厄の年であった。因みに後厄の年は、奈良市へ異動したので、怪我する機会は失われた。

奈文研では、何度か出入りした平城が一番長かったのであるが、いずれも、土器を避けた異動であった。入所して新人研修を受けていた頃に、「お前、土器の図…、まあ、ええわ」と言ったT部長の一言が思い出されるのである。それはともかく、もともと、それほど器用でもないので、自分でやってみることが好きで、学生時代にはタガネを作り、遺物と同じように、文様を彫ったり透彫をしたりしていた。そういうわけで、奈文研で飛鳥寺出土挂甲の復原に携わることができたのは、望外の幸運であった。また、弓矢を作り飛ばすこともした。実際に作ってみると、頭の中で考えていた通りにはいかないことが、逆に思いもよらないことがわかつたりすることがあり、結構「どきどき、わくわく」しながら進めたものである。

こんなことを書き続けると、今度は「お前、研究所の仕事…」と言われそうである。「まあ、ええわ」と言ってお許しをいただきたい。30年間、お世話になりました。（企画調整部長 小林 謙一）

私がしてきた仕事

70年安保闘争など学生運動のうねりの中で、新たな世界を展望する歴史学への思いを抱きつつ奈文研に入所してから、38年が過ぎる。その間、私が携わってきた仕事の一つに、官衙遺跡発掘技術の向上と

情報の共通化の推進がある。それは第一に、1970年代以降に官衙遺跡の発見例が増加し、その調査研究が注目され始めたこと、第二に、柱穴をいきなりの半截・完掘して貴重な情報を抽出できていない現場が多かったこと、第三に、最新の知識・技術や調査成果が共有されず、発掘方法や遺跡の保存対策に苦慮している状況があったからだ。

こうした状況を改善すべく、官衙研修や調査助言、情報のデータベース化と公開、『古代の官衙遺跡』の編集などをおこない、また、古代官衙・集落研究集会を通じて、各地の調査員や研究者との情報交換やネットワークの構築なども図ってきた。このように、文化財行政に資する研究課題を自ら設定し、それに取り組める環境を与えていただいたことに感謝したい。

官衙遺跡はなかなか自らの正体を明かしてくれない。その正体を見破る万能試薬の調合もままならないから、遺跡の性格を早く的確に判断することは容易でない。一方、そのようにやっかいな遺跡だけに、官衙関係遺跡との対話は、謎解きや未知との遭遇という楽しさを味わえる世界でもあった。また、官衙遺跡は律令国家の成立や変遷を探るうえで重要な位置を占めているから、学生時代に抱いた歴史学的国家論などへの熱い思いを呼び覚ましてくれる機会でもあった。その意味では大切な人に巡り会ったようなものだ（奈文研では、人生の伴侶となる人にも巡り会っちゃったのだが）。

この仕事は、諸先輩が培ってこられた資産や同僚など皆様の協力のお陰で進めることができたことは言うまでもない。しかし、奈文研の資産に38年間の利息を付けて恩返しできたのか、甚だ心もとない。

膨大な集落遺跡の資料を歴史資料として生かし、その発掘の意義を市民に示すことなど、国内にも文化財行政に資すべき研究課題は山積していると思う。今後は皆様のご活躍を一市民として見守りたい。

（文化遺産部長 山中 敏史）

四十年と、ちょっと。

「お帰り」と、憶えていてくれる人もあるって、2007年4月、わたしは20年ぶりに「奈文研」に帰ってきた。庁舎も築何十年の貴禄に、ますます風格を増し、「まだ、そのままやったんやなあ」と、それにも妙な感懷があつたり、あのころは会計課といった

部屋の自分が座っていたあたりを思いだす。窓越しに、夏になると、うすい紫の花をつけるムクゲの木が、確かにあったはず。

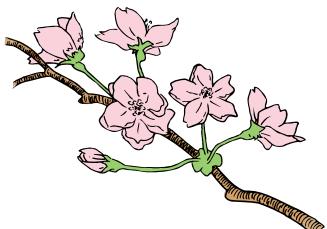
最初に転任してきて2年目、1986年から始まった長屋王邸跡やその周辺の発掘で11万点もの木簡が出土した。用意したコンテナは、またたく間に足りなくなってしまった、新米の用度係長は、係の人と一緒にその緊急手配をする「お役目」を担うこととなる。宮跡の発掘開始前には、現場ハウスと仮設トイレを先ず用意して、埋め戻しには、トラック何台分かの砂を発注する。空撮のためのヘリコプターは八尾の飛行場から飛んでくる。

前任の博物館とは、まるで違う仕事も、活気があって面白かったし、現場を終えたあの研究員の人が誘ってくれる「放課後」も、また楽しかった。

あそころ小学生だった娘は言っていた。「お父さんの研究所のこと、新聞によく出てるね」。ちょうど社会科の時間に、奈良の都のことなどを勉強していたのだろう。仕事の締め切りや日ごとの伝票処理や東京からの電話に追われていて、発掘のことや研究の中身などほとんどわからなかったが、「お父さん」としては、ちょっと鼻が高かったものだ。

広島、東京、大阪勤務と、奈良博を経由して戻ってきた、2度目の「奈文研」は、高松塚古墳の発掘調査と石室解体のさなかにあった。そして、平城宮跡の国営公園化や遷都1300年祭に向けて、研究所を取り巻く状況や、独立行政法人としての運営の難しさなど、課題はますます大きくなるばかりだ。

公務員として勤めはじめて（いまは、独法職員ということになるが）、40年とちょっとのうち、奈文研は6年。生来の気短かで、若い頃はよく人とも衝突した。まわりの方々のご辛抱とご理解をいただいて、ともかくなんとかやって来ることができたのだと思う。いまなら打ち明けてもいいだろう。仕事がうまくいかなくて、宮跡の中の道をとほとほ歩いていたこともあるのです。そうして今、2度にわたって奈良文化財研究所の一員として送ることができた幸せを噛みしめている。（管理部長 西村 博美）



光は西へ—奈文研へ

奈良にやってきたのは1973年4月。同期に入所した新人は6名、年齢には幅があった。文化庁の出向から戻った金子裕之氏も含めた7名は、研修だけでなく、研究会をはじめいろいろな場面で、行動をともにしていた。

奈文研ではなんといっても発掘調査の思い出が中心となる。発掘は平城、藤原両地区とも経験した。入所するとまず、平城宮の研修現場に入る。しばらくは、いっしょに仕事をする発掘作業員の奈良弁を理解するのに必死だった。入所2年目になると大きな現場の発掘担当者をまかされる。自分は薬師寺西僧房の調査だった。古代の僧侶の生活が、火災により焼け落ちて、そのまま埋まっていた稀有な現場である。その頃の薬師寺は金堂の再建工事の真っ最中。本坊では昼に、我々現場班のためにきしめんを準備して頂いており、朝一番に奈文研側の人数を遅滞なく連絡するのも担当者の重要な役目だった。発掘現場は、多数経験した。担当者になったのは、平城宮、藤原宮以外では、大官大寺回廊、本薬師寺西塔などである。そうした遺跡の理解のためにも、日本だけでなく、広く東アジアに目を広げる必要を痛感し、勉強の範囲をひろげるきっかけとなった。

入所してまもなく、ある研究室に顔を出したら、無口な田中哲雄氏からいきなり「何センチ？」と聞かれた。サッカーシューズの寸法である。否応なく昼はグラウンドの生活が始まる事になる。藤原へ移ってからはポジションはもっぱらキーパー、取って当たり前、取りこぼしたらぼろくそに野次が飛ぶ、という世界だ。仕事を終え、夕方になると一室に集まり、サッカー談義に興じるという毎日だった。

発掘以外では飛鳥資料館でいろいろな特別展に関わることができて、新しく目を開かされたことが多かった。両調査部での遺物整理、報告書作成に関わる思い出も尽きない。どの部署でも個性の強い先輩方がいた。また考古学だけでなく、建築史、文献史をはじめ、学際的な雰囲気のなかで多くを学んだ。有難いことと思っている。

東北の田舎から東京の大学へ、そして就職は奈良へ。時あたかも新幹線が西へ西へ延伸していたころで、そのキャッチフレーズ「光は西へ」は自分の奈文研での思い出に重なる。

（企画調整部 千田 剛道）